The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

白居易の「月」の詩

中木　愛

はじめに

自然物を人間に好意的な物ととらえて詠むのは、唐詩に見られる大きな特徴であり、[1]中でも月への親しみについては、従来、李白の詩が多く考察対象とされてきた。白居易もまた月への親しみを多く詩に詠んでおり、月を風景描写や賞翫の対象として詠み込むものの他に、白居易の方から積極的に月に働きかけていくものが見られる。例えば、江州左遷後の作には、月という自然物に人間と同じ情を認めて人格化したり、自分の日常により密着した存在、好意的な存在として月を詠むものが現れる。そこからは、苦境のときや孤独のとき、白居易が月という自然物からも何とか自分なりの幸福をすくい取っていこうとしたことが読みとれるように思う。また晩年においては、非常に安定した形で月との心の交流が展開されており、そこにも月が白居易の幸福感を増す一要素となっていることが窺える。以下、幸福感との関係を軸に白居易の月の詩を考察し、併せて李白との違いについても触れてみたい。

一　賞翫の対象としての月

白居易の詩約二千八百首のうち、月が詩中にあらわれるものは四百首近くある。そのうち単なる風景描写とは別に、月への親しみや愛着を詠んだり、月を擬人化して詠み込むなど、月に対する特別な意味づけが認められるものは三十首あまりある。

本章ではまずこの中で、賞翫の対象として月を詠んだ詩の中に、月への親しみが詠出されているものについて見ておきたい。江州左遷前は特に友との交遊の中で月を詠むものが目立ち、宴会など娯楽の場での詩にも、白居易の月への親しみを見ることができる。例えば「178 首夏同諸校正遊開元觀因宿玩月」[2]では、

置酒西廊下　　酒を西廊の下に置き
待月杯行遲　　月を待ちて　杯行くこと遲し

NII-Electronic Library Service

と、酒杯を手に月の出を待ち望む様子を描いたあと、

須臾金魄生　　須臾にして金魄生じ
若與吾徒期　　吾が徒と期するが若し

と詠んでいる。月の出を今か今かと待っていると、まるで約束を交わしていたかのように金色の月が姿を現したと言い、白居易は宴の仲間を迎えるように月を迎えている。ここでは「月を待ちて」「吾が徒と期するが若し」といった月の擬人化に、月を愛する気持ちがよく表れている。

このような月を待つという表現は、

望湖憑檻久　　湖に望み檻に憑ること久しく
待月放杯遲　　月を待ちて杯を放つこと遲し
（891江樓偶宴贈同座、長安→江州）

山客硯前吟待月　　山客は硯前に吟じて月を待ち
野人尊前醉送春　　野人は尊前に醉ひて春を送る
（3003和裴令公一日日一年年雜言見贈、退居後）

獨酣還獨語　　獨り酣にして還た獨り語り
待取月明迴　　月明を待取ちて迴る
（3578對新家醞玩自種花、退居後）

など、晩年に至るまで詩中に散見する。また、

沙鶴上階立　　沙鶴　階に上りて立ち
潭月當戶開　　潭月　戶に當りて開く

此中留我宿　　此の中　我を留めて宿せしめ
兩夜不能迴　　兩夜　迴る能はず
（185仙遊寺獨宿、左遷前）

月留三夜宿　　月留めて三夜宿せしめ
春引四山行　　春引きて四山に行かしむ
（3249早春題少室東巖、退居後）

のように、美しい月が私を引き留めるといった擬人化も見られる。このほか、

戀月夜同宿　　月を戀ひて夜同に宿し
愛山晴共看　　山を愛して晴れに共に看る
（436酬李少府曹長官舍見贈、左遷前）

起晚憐春暖　　起くること晩くして春の暖きを憐れみ
歸遲愛月明　　歸ること遲くして月の明らかなるを愛す
（2828晚起、退居後）

愛風巖上攀松蓋　　風を愛し　巖上　松蓋に攀り
戀月潭邊坐石稜　　月を戀ひ　潭邊　石稜に坐す
（3103香山寺二絕　其二、退居後）

などの「愛月」「戀月」[3]といったストレートな感情表現や、

獨到山下宿　　獨り山下に到りて宿し
靜向月中行　　靜かに月中に向ひて行く
（324山下宿、江州）

NII-Electronic Library Service

寂寞挑燈坐　寂寞として燈を挑げて坐し
沈吟蹋月行　沈吟して月を蹋みて行く
（1279夏夜宿直、忠州のあとの長安）

起向月下行　起きて月下に向ひて行き
來就潭中浴　來りて潭中に就きて浴す
（2295香山寺石樓潭夜浴、退居後）

歩月憐清景　月に歩みて清景を憐れみ
眠松愛緑陰　松に眠りて緑陰を愛す
（2526閑詠、退居後）

小宴追涙散　小宴　涙を追ひて散じ
平橋歩月回　平橋　月に歩みて回る
（2601宴散、退居後）

などの、「向月」「蹋月」「歩月」といった自己の動作の描写からも、白居易の月への親しみを見て取ることができる。

このように賞翫の対象として月を詠じた詩では、左遷前は交遊の場で、左遷期には孤独や寂寥の中で、晩年には心穏やかな状態で静かに月に向かうものが多いというような各時期の作詩背景における特徴は見られるが、そこに詠出された月への親しみは生涯を通して変わっていない。

なお、唐詩における擬人法については、澤崎久和氏[4]が自然の人格化といえる擬人法が唐詩で活発に使用されることを指摘され、自然物を「送」「迎」「待」「留」「知」といった動詞とともに用いる例や、自然物に「爾」「汝」「君」と呼びかける例などを詳細に考察されている。白居易の月の詩にも「留」や「待」の語を用いた擬人表現が見受けられるが、ここで取り上げたのは賞翫の対象としての月への親しみである。これとは別に、賞翫や風景描写の域を超えた、月に対する特別な意味づけ（「知」「送」「迎」といった語や月への語りかけを含むもの）が見られるものについては次章以下で触れる。

二　月への働きかけ　――江州、忠州左遷を経て――

白居易の月への親しみは、江州左遷を経て大きく増長し、月への積極的な働きかけが見られるようになる。江州左遷後まもなくの作、「980山中問月」を見てみよう。

980　山中問月

爲問長安月　爲に問ふ　長安の月に
誰教不相離　誰か相ひ離れざらしむると
昔隨飛蓋處　昔　蓋を飛ばす處に隨ひ
今照入山時　今　山に入る時を照らす
借助秋懷曠　助けを借りて　秋懷　曠しく
留連夜臥遲　留連して　夜　臥すこと遲し
如歸舊鄉國　舊鄉國に歸るが如く
似對好親知　好親知に對するに似たり
松下行爲伴　松下　行きて伴と爲し

NII-Electronic Library Service

谿頭坐有期　　谿頭　坐して期有り
千巖將萬壑　　千巖と萬壑と
無處不相隨　　處として相ひ隨はざるは無し

この詩は、長安の月に、なぜ私と離れずに江州までついてきたのか、と問うことから始まっている。「昔　蓋を飛ばす處に隨ひ、今　山に入る時を照らす」とあるように、かつて朝廷に出仕するとき一緒だった長安の月が、今ここでも自分を照らしてくれることに慰められる思いがしたのだろう。[5] 月と向かい合う時の気持ちを、「舊鄉國に歸るが如く、好親知に對するに似たり」と言う。そして白居易は、松の下を月を伴って歩き、渓流のほとりに座って月と約束をする。幾重にも折り重なる険しい山の中で、月はどこへでもぴったりと白居易につきしたがっていた。ここで詠まれる月は、賞翫の対象としての美しい月ではない。時間的空間的制限を超えて自分に密着した月への愛着を一句一句懸命に詠み込んでいる。

また、忠州より帰還後の長安では、同じく月が自分についてくるという現象について、次のように詠み、月に情を認めている。

578　客中月　　客中の月
客從江南來　　客　江南從(よ)り來る
來時月上弦　　來る時　月　上弦
悠悠行旅中　　悠悠たり　行旅の中
三見清光圓　　三たび　清光の　圓(まどか)なるを見る
曉隨殘月行　　曉に　殘月に隨(したが)ひて行き
夕與新月宿　　夕に　新月と宿す
誰謂月無情　　誰か謂ふ　月に情無しと
千里遠相逐　　千里遠く相ひ逐ふ
朝發渭水橋　　朝に　渭水の橋を發し
暮入長安陌　　暮に　長安の陌(みち)に入る
不知今夜月　　知らず　今夜の月
又作誰家客　　又た誰が家の客と作(な)るを

これは、旅の途中で見た三度目の満月を詠んだもので、「曉に殘月に隨ひて行き、千里遠く相ひ逐ふ」は、長旅の道中、月が白居易とともにあったことを言っている。「誰か謂ふ　月に情無しと、千里遠く相ひ逐ふ」、つまり、月は無情だと言われるがそんなはずはなく、情があるからこそ千里もの道のりをもついてきてくれるのだと言い、白居易が月を情あるものとしてとらえ、この上ない親しみを感じていることが分かる。また末二句は、長安に到着した白居易が、今夜月はどこに泊まるのだろうかと心配しているようにも思われ、月への思いやりが感じられる。

これら二首は、いつでもどこでも自分についてきてくれる月にこの上ない親しみを感じ、月を人格化したものである。

次に挙げる「993中秋月」は、先に挙げた「山中問月」と同年、江州での作である。ここではしかし、月はもっ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

ぱら人の愁いを引くもの、人界と隔たって人情を解さないものとして描かれている。

993　中秋月

萬里清光不可思
添愁益恨繞天涯
誰人隴外久征戍
何處庭前新別離
失寵故姫歸院夜
沒蕃老將上樓時
照他幾許人腸斷
玉兔銀蟾遠不知

中秋の月

萬里の清光　思ふべからず
愁を添へ恨みを益して天涯を繞る
誰人か　隴外久しく征戍する
何處の庭前にか　新たに別離する
寵を失ふ故姫　院に歸る夜
蕃に沒する老將　樓に上る時
幾許をか照他して　人腸　斷つ
玉兔銀蟾　遠くして知らず

一年のうちで最も美しいはずの月、楽しいはずの中秋節だが、この詩は「月はもの思うことはない、この世のあちらこちらに愁いや怨みを増して空をめぐっている」と、深い嘆きで始まっている。そのあと、兵役に出ている兵士、庭前で離別する人、寵愛を失った姫、捕虜になった老将と、今宵満月の下で憂えているであろう人々に目が向けられる。末二句に「月明かりは彼らを照らして断腸の思いにさせるが、月に住む兎や蛙は知らない」とあるように、ここで詠まれている月は、人界からはるか遠い世界のものであって人事を解さない。詩全体が一貫して嘆き一色となっているが、このとき白居易は、弟白行簡と離別して三年目の秋でもあった。家族や故郷を思わせる中秋の月に、白居易の心はとりわけ沈んだのであろう。

同じ江州の廬山にあって、「山中問月」のように積極的に月を友とし親しみを感じる詩があるかと思えば、人を憂えさせる非情な月よ、と嘆きの詩を詠む。これは、当時白居易の心の振幅がいかに大きかったかを物語っているようにも思われる。江州左遷という突然の不遇に見舞われ、白居易の心は大きく揺れていた。不遇から生じるマイナス感情を解消すべく、個人的幸福の領域を耕すことにエネルギーを注いだことは従来より指摘されている。花への傾斜がその一つであり、この時期白居易は積極的に花を自分の庭に移植し、所有化したり語りかけたりする詩を作っている。[6] 月の詠み方を通してもまた、当時の心の揺れが垣間見られるのではないだろうか。

この時期の白居易は、嘆きや愁いを引く要素を十分に持ち合わせている月を、そのまま詠んで憂いに沈むだけでなく、むしろ自分自身に情あるもの、自分自身に好意的なものとして必死に詠み込もうとしている。白居易の幸福を構成する一要素として、月を取り込む試みもなされたのである。

そしてこのあとは、月が人間を憂えさせると言うなど、直接人間にマイナスに作用することを「中秋月」のように明白な形で詠む例は見られなくなる。[7] これ以後は確実に自分に親しいものとして、月を見る目が安定していったと言えよう。

NII-Electronic Library Service

例えば、次の赴任地杭州への行き帰りに、白居易は自分を送ってくれる月を詠んでいる。まず、長安から杭州へ赴くときの作「1309宿陽成驛對月」を挙げる。

1309　宿陽成驛對月　　陽成驛に宿し月に對す

親故尋回駕　　親故　尋で駕を回し
妻孥未出關　　妻孥　未だ關を出でず
鳳皇池上月　　鳳皇　池上の月
送我過商山　　我を送りて商山を過ぐ

これは、途中まで見送りに来てくれた親族や友人たちが、みな車を引き返して帰ってしまい、同行の妻子ははるか後方にいるといった状況である。風光明媚な土地杭州への赴任に幾分の期待もあっただろうが、左遷の身に代わりはなかった。妻子もあとからも来るとはいえ、このときの白居易には、心もとなさや憂愁、ひとりぼっちの孤独や寂寥など、マイナス感情が生じる要素は十分に揃っていたであろう。[8]そんなとき、白居易は「鳳皇池上の月、我を送りて商山を過ぐ」と詠った。月が商山まで私を送ってくれていると、月から慰めを得ることができたのである。

月に情を認めようとする姿勢は、次の「339宿藍溪對月」にも見受けられる。同じく杭州への道中に詠んだ詩である。

339　宿藍溪對月　　藍溪に宿し月に對す

昨夜鳳池頭　　昨夜　鳳池の頭
今夜藍溪口　　今夜　藍溪の口
明月本無心　　明月　本より心無きも
行人自廻首　　行人　自ら首を廻らす
新秋松影下　　新秋　松影の下
半夜鐘聲後　　半夜　鐘聲の後
清影不宜昏　　清影　宜しく昏すべからず
聊將茶代酒　　聊か茶を將て酒に代ふ

ここでは「明月　本より心無し」とあり、一見月には心がないと客観的事実を冷静に述べているように見える。しかしそのあとに続く「行人　自ら首を廻らす」とは、月に心がないと分かっていながら、それでも自ずと月をふり返って見てしまう白居易自身の姿であろう。月は無情の物体であるが、それでもふり返ってしまうのはなぜか、人がふり返りたいと思う何か、人をふり返らせる何かがあるからだと、白居易は思ったのではないだろうか。月は、「新秋　松影の下」にも「半夜　鐘聲の後」にも、白居易のそばにあった。

この詩は、白居易が月に対して自分への情を認めようとしている点においては、前の二首と共通している。ただ前の二首では、「爲に問ふ　長安の月に、誰か相ひ離れざらしむると」と、誰が自分と月とを離れさせないようにしているのか問いただしたり、また、月が自分に従って来ないところはない、つまり自分とぴったり密着し

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

ている様子を、「千巖と萬壑と處として相ひ隨はざるは無し」と二重否定を用いて強調したり、さらに、月に情があるのだという思いを、「誰か謂ふ 月に情無しと、千里遠く相ひ逐ふ」と反語を用いて詠むなど、月への強い働きかけを必要としている心情がその背後に認められる。一方「宿藍溪對月」ではこのような技法は用いられておらず、末二句で酒ではなく茶を入れて清らかな月に向かおうというように、静かに落ち着いて月との交流を感じ取ろうとしていることが読みとれる。それには、この詩が風光明媚な土地杭州の作であること、杭州にあって精神的な落ち着きを得ていたことなどが関係しているのかもしれない。[9]

同じく、杭州を去るときも次のような詩を詠んでいる。

375 別萱桂

使君竟不住
萱桂徒栽種
桂有留人名
萱無忘憂用
不如江畔月
步步來相送

萱桂に別る

使君 竟に住まらず
萱桂 徒に栽ゑ種う
桂は人を留むる名有り
萱は憂ひを忘るる用無し
如かず 江畔の月
步步來りて相ひ送るに

花を愛し木々を愛した白居易は、杭州でも萱や桂を植えて楽しんでいたが、洛陽へ持って帰ることはできなかった。人を引き留めるという桂や実際は憂いを忘れさせる効力のない萱より、月のほうがよいのだと白居易は言う。自分の一歩一歩に歩調を合わせて見送ってくれるという末句からは、白居易が自分の肌身で感じとった月への愛着が感じられる。

三 月と風景 ―― 杭州、蘇州、洛陽 ――

白居易がとりわけ杭州西湖の風景を愛したことはよく知られているが、[10] 杭州では風景もまた、幸福を感じ取る要素として加わったようである。杭州期の詩には、一個の対象として月を意識するものとは別に、月を含む風景全般を詠んだものも多い。風景の意を表すのに「風月」[11]の語があるが、これは杭州赴任を経たあたりから「風月に報じて知らしめよ」と、「風月」を擬人化した表現が現れる点で興味深い。

2364 杭州迴舫

自別錢塘山水後
不多飲酒懶吟詩
欲將此意憑迴櫂
與報西湖風月知

杭州迴舫

錢塘の山水に別れてより後
多くは酒を飲まず 詩を吟ずるに懶し
此の意を將て 迴櫂に憑まんと欲す
與に西湖の風月に報じて知らしめよ

杭州滞在中、白居易はしばしば宴を開き西湖の美しい風景を賞でて楽しんでいた。帰京とはいえ美しい杭州に後

NII-Electronic Library Service

ろ髪引かれる思いであっただろう。西湖を離れて歌にも酒にも興趣が湧かない気持ちを、舟に託して「西湖の風月に知らしめよ」と言う。この「西湖の風月」は、一句目の「錢塘の山水」と同じく杭州西湖の美しい風景の意で使われた言葉であろう。[12] 自分の心境を西湖の風月に伝えるということは、西湖の風月ならそれを分かってくれると、白居易が見なしていることを意味する。

杭州を離れるときに生まれた「風月に報じて知らしめよ」という表現を、白居易は後にも二度使っている。懐かしい蘇州の風月に「爲に江山の風月に報じて知らしめよ、今に至るも白使君猶ほ在りと」（3574 送王卿使君赴任蘇州因思花迎新使感舊遊寄題郡中木蘭西院一別）と我が身の安否を知らせるものと、これから向かう洛陽の風月に「東都 箇の狂賓客を添ふ、先づ報じて壺觴風月に知らしめよ」（2722將至東都先寄令狐留守）と事前の挨拶を寄せるものである。風月の方から白居易に働きかけるものは見られないが、自分の気持ちを理解してくれる前提のもとに風月に伝言を寄せるのは、風月に情を付与していることの表れと言えよう。

ところで、白居易においては愛する気持ちが深ければ深いほど、それに情を認めて友達同士のように接したり、また、それを自分のものだと思う所有意識が強くなるようである。日用品では炉や衣類あるいは家などが、自然物では花や鶴、石などがそういった対象であった。

とくに洛陽の新居に移って安寧の地を得た白居易は、そこに赴任先から持ち帰った植物や鶴、石などお気に入りのものを集めて庭造りに勤しんだ。風景に対する情の付与と所有意識は、杭州での美しい風景との遭遇を経て、のちにまた、自宅の庭にお気に入りの景観を作り上げることによって、一層深まっていったのではないだろうか。杭州期の作品に見られる「杭越の風光詩酒の主、相ひ看て更に何人と與にす合き」（2311元微之除浙東觀察使喜得杭越鄰州先贈長句）、「爲に涼風清景に向ひて道ふ、今朝 我が兩三人に屬すと」（3180早秋登天宮寺閣贈諸客）などは、風景を所有化する発想である。そして、洛陽帰還後の「2386吾廬」では「道ふ莫かれ兩都空しく宅有りと、林泉風月 是れ家資」（2386吾廬）と言い、家の庭で目にすることのできる自然物の集合を、我が家の財産だと所有化している。退居後の洛陽で江南の風景を再現できたときは、「白藕の新花 水を照らして開き、紅窗の小舫 風に信せて迴る、誰か一片の江南の興をして、我を逐ひて慇懃に萬里に來らしむる」（2733白蓮池汎舟）と詠んでいる。ここに月は登場しないが、舟の上で白蓮の花の開くのを目にし、江南と同じ風を感じた白居易は、江南の興が自分を逐ってはるばるやって来たと思ったのである。心と体がよほど江南の風景と密着していないと難しい発想であろう。個体として意識する月に加え、構成要素として月を含む「風月」もまた、白居易にとって情を通わせることのできるものだった。風景もただ美しいと賞でる以上の意味を持っていたのである。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

「2380九日思杭州舊遊寄周判官及諸客」に「風景は宮相に隨ひて去らず、歡娛は應に使君を逐ひて新たなるべし、江山賓客 皆舊の如し、唯だ是れ當筵 主人を換ふ」と詠うように、杭州を去るにあたっては、風景は白居易を追って来なかった。それだからこそ、前に取り上げた「步步來りて相ひ送る」（2364杭州迴舫）のように、自分についてきてくれる月という個体への愛着はひとしおのものでもあっただろう。自宅の庭造りの際にも、白居易は「池の西廊を結構し、池の東樹を疏理す。此の意人知らず、月を待つ處を爲らんと欲す」（387池畔二首其一）、「竹徑を疏通し月を迎へんとす」（2387題新居奇宣州崔相公）と、特に月を眺める場所をセッティングしている。

四　月との心の交流 ―― 晩年 ――

さらに晩年になると、白居易の月は、人の死という悲しみを知るほど情のあるものとして詠まれるようになる。

2799　過元家履信宅
雞犬喪家分散後
林園失主寂寥時
落花不語空辭樹
流水無情自入池

元家の履信宅に過ぎる
雞犬 家を喪ふ分散の後
林園 主を失ふ寂寥の時
落花 語らず 空しく樹を辭し
流水 情無く 自ら池に入る

風蕩醼船初破漏
雨淋歌閣欲傾敧
前庭後院傷心事
唯是春風秋月知

風 醼船を蕩らして 初めて破漏し
雨 歌閣に淋ぎて 傾敧せんと欲す
前庭後院 傷心の事
唯だ是れ春風秋月のみ知る

元家とは元宗簡の家のことで、元宗簡と白居易は及第前から親交があり、心を分かり合える貴重な友の一人だった。[11] 忠州から長安へ帰還後、白居易は念願かなって元家の東隣に新居を構えるのだが、翌年の春、元宗簡は病死する。「571晚歸有感」の自注に「元八少尹、今春櫻桃花時長逝」とあるように、桜桃が咲くころだったらしい。

この詩は元家の前を通りかかった白居易が、十年前に亡くなった親友を偲んで詠んだものだが、元宗簡が病逝した翌年の春、同じく彼の死を悼んだ「元家花」という詩がある。

1270　元家花
今日元家宅
櫻桃發幾枝
稀稠與顏色
一似去年時
失却東園主
春風可得知

元家の花
今日 元家の宅
櫻桃 幾枝をか發く
稀稠と顏色と
一に去年の時に似たり
東園の主を失却す
春風 可に知るを得んや[13]

NII-Electronic Library Service

元家の庭には、去年と同じ桜桃の花が咲いていた。花の咲き具合も色も去年と変わらないのにこの家の主はもういないと、白居易は変わらず巡ってきた春に人間の儚さを悲しんでいる。人間の一回性に対比される不変の自然、春風は人の死の悲しみなど知るべくもなかった。

先の「2799過元家履信宅」は、これより十年後の作である。「春風 可(あ)に知るを得んや」と、春風が知らなかった悲しみは、十年の歳月を経て「唯だ是れ春風秋月のみ知る」ものとなっている。[16]

ところで、「月」が何かを「知る」という表現は、同じく退居後の同時期の詩「失婢[17]」にも見られる。この詩は、白居易が脱走した婢を捜し求める掲示を見て、原因は主人の薄情さにあると批判したあと、次のように続いている。

籠鳥無常主　　籠鳥に常の主無く
風花不戀枝　　風花は枝を戀はず
今宵在何處　　今宵 何處にか在る
唯有月明知　　唯だ月明のみ知る有り

主人から自由になった彼女は今宵どこにいるのだろう、ただ月だけが居場所を知っていると言う白居易は、彼女が月明かりに照らされている様子を想像したのだろう。月の光がどこへでも届くものであることを考えると、月が人の居場所を知っているというのは幾分発想しやすいかもしれない。しかし、「2799過元家履信宅」の「春風秋月」は、人の居場所ではなく、人の死という悲しみを解している。ここでは、月が白居易の心を解してくれている。

「2799過元家履信宅」にある「春風秋月」は、限定された「春の風」と「秋の月」ではなく、「風月」と同じように賞でるべき美しい自然を代表、象徴するものとも考えられる。心を通わせあった知己との思い出は、ともに春を楽しみ、月を眺めた往事とともによみがえるものであっただろう。ただ個別の月であれ月を含む風景であれ、それが白居易にとって悲しみを共有できる存在であり、悲しみを共有してくれるものの存在を感じることによって慰めを得られたということは言えるのではないだろうか。

晩年、白居易は香山に宿泊することが多くなり、それは自らを香山居士と称すほどの愛着ぶりだった。香山をとりまく清逸な風景、閑適な生活、香山寺の僧侶たちとの交流が白居易の心をとらえたのだが、中でも「夜來風月好し、悔ゆらくは香山に宿せざるを」(3161喜閑)と詠うほど、その風景は美しかったようだ。[18]

3274　初入香山院對月　　初めて香山院に入り月に對す
老住香山初到夜　　老いて香山に住まんとし 初めて到る夜
秋逢白月正圓時　　秋 白月の正に圓(まどか)なる時に逢

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

ふ

今従り便ち是れ家山の月
試みに問ふ 清光知るや知らずやと

香山で余生を送ろうと思って初めて宿泊した夜、満月があまりに美しかった。白居易は月に対して、「これからお前は我が香山の月になるのだが、そのことを知っているか」と語りかける。ここで月は確実に白居易の親しき友であり、月に対する情の付与と所有化が色濃く詠出されている。

また次の詩にも、白居易と月の深い心の交流が詠まれている。

2619 對琴待月

竹院新晴夜
松窗未臥時
共琴爲老伴
與月有秋期
玉軫臨風久
金波出霧遲
幽音待清景
唯是我心知

琴に對し月を待つ

竹院 新たに晴るる夜
松窗 未だ臥せざる時
琴と共に老伴と爲し
月と秋期有り
玉軫 風に臨むこと久しく
金波 霧を出づること遲し
幽音 清景を待つ
唯だ是れ 我が心のみ知る

静かな夜、白居易は床に就かず独り琴を弾いていた。琴もまた白居易のお気に入りの一つだが、その琴を伴に月と秋の約束があると言う。「玉軫 風に臨むこと久しく、金波 霧を出づること遲し」、つまり、琴が風になでられるように吹かれ、雲間に隠れた月がなかなか出てこない状態を、白居易は「幽音 清景を待つ」（琴の音が月の出を待っている）という感覚で切り取った。そしてそのことはただ自分の心だけが知っていると結ぶ。琴と月という白居易が愛したもの、大好きなものがあって、[19] そこには確かに情が通い合っていることが分かる。

五 李白の詩との比較

以上、白居易が月を情あるものとしてとらえ、月と心を通わせるに至る過程を追ってきた。従来の研究では、月との交流については李白の詩が考察対象とされ、李白にとって月は親しむべき友であったことなどが指摘されている。[20] しかし、李白の詩に見られる月への親しみは、白居易のそれと質的な相違があるのではないかと思われる。以下、李白の月を詠んだ詩の代表作と白居易の月の詩を比べてみよう。

月下獨酌四首 其一

花間一壺酒
獨酌無相親
舉杯邀明月
對影成三人

花間 一壺の酒
獨り酌みて 相ひ親しむ無し
杯を舉げて 明月を邀へ
影に對して 三人と成る

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

月既不解飲　月既に飲むを解せず
影徒隨我身　影徒に我が身に隨ふ
暫伴月將影　暫く月と影とを伴ひ
行樂須及春　行樂須らく春に及ぶべし
我歌月徘徊　我歌へば月徘徊し
我舞影凌亂　我舞へば影凌亂す
醒時同交歡　醒むる時同に交歡するも
醉後各分散　醉ひて後各おの分散す
永結無情遊　永く無情の遊を結び
相期邈雲漢　相ひ期す邈かなる雲漢に

李白は、月と月明かりによってできる自分の影とを酒飲み友達として迎え、しばらく三者で楽しもうと言う。月や影は酒を飲むことはできなくても、李白の歌や踊りに反応してくれた。しかし、「醒むる時　交歡を同じくするも、醉ひて後　各おの分散す」とあるように、その交わりはいずれは離れればなれになるもので、李白はそれを「無情の遊」、つまり人間の交流に通い合う「情」の存在を超えたものとして捉えている。李白は酒に酔ったときの心地よい境地を、「三杯大道に通じ、一斗自然と合ふ」（其二）、「酔ひて後天地を失ひ、兀然として孤枕に就く、知らず吾が身有るを、此の樂しみ最も甚だしと爲す」（其三）と表しているが、「無情の遊」というのも、これに似た忘我の境地、人界を超越し宇宙や自然と一体になるかのような境地を言うのであろう。[21] 月や影と再会を期す場所も「邈かなる雲漢」であり、李白独特の世俗を逸脱したスケールの大きな宇宙観、自然観が窺える。ここで白居易の詩を思い返すと、李白の「無情の遊」「相ひ期す　邈かなる雲漢に」は、それぞれ白居易の「誰か謂ふ月に情無しと」（587客中月）、「松下行きて伴と爲し、谿頭坐して期有り」（980山中問月）と、あまりに鮮やかな対照をなしている。白居易の月には情があり、白居易が松の下を歩くのに伴い、川の畔で約束を交わすというように、日常にぐっと密着した月であることが分かる。

また李白には、白居易の「980山中問月」と同じく、月が人間に従って来る現象を詠んだ詩がある。『全唐詩』の中で「問月」の二字が詩題に含まれるのは、李白と白居易のこの二首のみであり、白居易が李白の詩を意識して「山中問月」を詠んだ可能性は大きい。

把酒問月　酒を把りて月に問ふ
青天有月來幾時　青天に月有りて來幾時ぞ
我今停杯一問之　我今杯を停め一たび之に問ふ
人攀明月不可得　人明月を攀ぢんとするも得べからず
月行却與人相隨　月行きて却って人と相ひ隨ふと
皎如飛鏡臨丹闕　皎として飛鏡の丹闕に臨むが

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

綠煙滅盡清輝發
但見宵從海上來
寧知曉向雲間沒
白兔擣藥秋復春
嫦娥孤棲與誰鄰
今人不見古時月
今月曾經照古人
古人今人若流水
共看明月皆如此
唯願當歌對酒時
月光長照金樽裏

如く
綠煙滅し盡き 清輝 發す
但だ見る 宵 海上從り來たるを
寧ぞ知らん 曉 雲間に向ひて沒するを
白兔 藥を擣きて 秋復た春
嫦娥 孤り棲みて 誰と鄰せん
今人 古時の月を見ず
今月 曾經古人を照らせり
古人今人 流水の若し
共に明月を看ること 皆 此の如し
唯だ願はくば 歌に當り酒に對するの時
月光 長へに金樽の裏を照らさんことを

どうして人間についてくるのかと月に語りかけるテーマは、白居易の詩と共通している。しかし、李白は月の清浄さや美しさ、神聖さなどを伝説を用いて詠んだあと、「今人 古時の月を見ず、今月 曾經古人を照らせり。古人今人 流水の若し、共に明月を看ること 皆 此の如し」と言い、月が人を照らす現象を、空間的にも時間的にも非常に大きなスケールで捉えていることが分かる。月が照らす「人」は李白個人ではなく、歴史上を生きる人類の意である。[22] 最後に、少しでも長い間月の光を我が酒杯に浴びていたいと言うのは、月という永遠、清浄、神聖なるものへの果てしない憧憬の表れであろうか。[23]

この詩のように李白の月の詩には伝説が多く用いられているが、白居易の場合、月への親しみを詠む際に月を神聖化したり月に関する伝説を用いることはない。[24] 第二章で取り上げた「993中秋月」には、末句で「幾許をか照他して人腸斷つ、玉兔銀蟾 遠くして知らず」と伝説が用いられていたが、これは、人間は月を見て様々に憂えるが月は人事を解さないことを詠んだもので、月への親しみではない。白居易が愛した月は、伝説によって一般化されたり、現実を超えたもの、神聖なものとして捉えられることはなく、あくまで個性ある一個の存在として、白居易の日常に近いところにあった。月に見られた情の付与と所有意識も、月という自然物に「個」を認めたことの表れと言えよう。この白居易の詩における「個」の問題については、また稿を改めて考えてみたい。

このように、李白が月に対して感じた親しみは、普通の人間の間に通い合う「情」がベースとなるような種類のものとは別であった。李白は俗世間から逸脱し、雲間遙かをも包括する大宇宙の中に自分自身を投じ、そこでそれらとの融合を求めたのであろう。[25] 「登太白峯」にある「願はくば冷風に乗りて去り、直ちに浮雲の間を出でん。手を擧ぐれば月に近づくべし、前行 山無きが若し」

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

といった句は、李白の方から月のある世界へと接近していく境地がよく表れているが、自分自身を月の世界へ飛ばす媒介として、酒が作用していたのかもしれない。もちろん白居易も、酒を飲みながら月を眺めることはあったが、例えば「清影 宜しく昏すべからず、聊か茶を將て酒に代ふ」（339宿藍溪對月）のように、清らかな月を前に眠ってしまってはよろしくない、「新秋 松影の下」「半夜 鐘聲の後」と常に傍らにある月と酒を介さずに向き合っていたいと言うところなどは、李白とは対照的である。

おわりに

以上、白居易の月への親しみを時代を追って考察してきた。賞でるものとしての月への親しみは、自然を擬人化し人間に好意的なものとして詠むようになる当時の流れを受けながら、生涯を通して変わることなく詠われていたが、月に対するそれ以上の特別な意味づけは、主に左遷という不遇に触発される形で深まっていった。江州、忠州期は、月にも人間と同じような情があること、月が自分自身に好意的に働きかけることを随時確認するかのように月を詠み込んでいた。こういった姿勢は、不遇の中で慰めや幸福を得る要素として、積極的に月を取り込む試みがなされたものと考えられ、以後徐々に安定を見せるようになる。杭州期は、赴任の行き帰りに自分を送ってくれる月への親しみを詠むほか、風景もまた同様に心を通わせる対象として賞でる以上の意味を持つようになった。そして洛陽帰還後には、月や風景を自分のものだとする所有意識も芽生えていった。さらに晩年になると、月は友の死といった悲しみや、風情ある夜のひとときの幸せをも共有できる存在として詠まれるに至った。

李白の月への親しみは、日常や現実を超えた宇宙との融合、一体化という形で詠出されていた。月との独自の世界を作り上げてそこから幸せを得る点では同じでも、白居易の場合は日常の現実の中に月というものをぐっと引き寄せ、情を付与し時には所有化しながら、その親しみを深めていった。そして実際人間の間に交わされるような心の交流を月と交わすことによって、慰めや幸福を得ることができたのである。この点が白居易の月の詩の特徴と言えるだろう。

（注）

①澤崎久和「唐詩における擬人法」（『高知大国文』一三、一九八二）参照。

②詩題上の数字は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店）の「綜合作品表」の作品番号による。

③『全唐詩』において、「戀月」の語は白居易にしか見られない。

④前掲注①論文。

⑤波戸岡旭氏は「白居易の詠月詩について」（『白居易研究年報』

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

第三号、二〇〇二）で、「この詩の注目すべきは、山中に居る白居易がその月に向かって「長安の月よ」と問いかけている点である。大都長安は白居易の心の故郷であり、かつてのその中央官僚時代のことにも思いは馳せられるのであって、長年住み慣れた都の空の月こそが、彼にとっての伴侶なのであろう。異郷の空に上る月も、白居易の目には、長安の月が、随身としてそばから離れず、この地にまでもきてくれているのだ、と映ったのである」と述べられている。

⑥拙稿「詠花詩に見られる白居易の幸福感」（『中國學研究論集』七、二〇〇一）で論じた。

⑦これ以前には下邽の「222效陶潛體詩十六首其十一」に「月明人を愁殺す」とある。また直接月が人を憂えさせるというものではないが、「796贈内」に「月に對して往事を思ふこと莫かれ」（下邽）、「624和友人洛中春感」に「悲しむ莫かれ 金谷園中の月」（左遷前）といった句がある。

⑧このころ李崔二君など同僚の死もあり、杭州への道中詠んだ詩には、「1310商山路有感」「1311重感」「1317山泉煎茶有懐」など感傷的なものが多い。

⑨杭州期における白居易の精神的ゆとりについて、玉城要氏の「白居易の閑適詩―兼済と独善の意識を中心にして―」（『筑波中国文化論叢』一三、一九九三）では、長安で高位高官に昇った達成感、諫官として長安でやるべき事はやったという満足感、多年にわたり窮通を繰り返してきたことによる達観、長安における政治の舞台裏の様子に嫌気がさしたことなどを挙げて説明されている。

⑩鎌田出氏の「白居易の愛した風景――杭州「西湖」へのトポフィリア――」（『中國詩文論叢』一七、一九九八）では、白居易によって西湖が詩材として確立したこと、また、白居易の西湖に対する態度には景色に能動的に関与しようとする意志が強く表れていることなどが指摘されている。

⑪白詩における「風月」の語の使用例は三十二例にのぼり、これは杜甫一例、李白二例と比べても統計的に多いが、特に時期的な偏りは見られない。

⑫「風月」が個別の「風」と「月」を指すのでなく、それらに代表される風景全般を指すものであったとしても、白居易が「風月」という言葉でとらえた杭州の景色は、やはり風（あるいは風のもたらす清らかさ）と月（あるいは月のもたらす明るさ）を抜きにしては語れないとも考えられる。「郭外迎人月、湖邊醒酒風、誰留使君飲、紅燭在舟中」（1371湖上夜飲）、「風吹古木晴天雨、月照平沙夏夜霜、能就江樓銷暑否、比君茅舍較清涼」（1374江樓夕望招客）のように杭州の美しい風景を詠んだ詩に月と風が登場するものは多く、また「可憐月好風涼夜、一部清商伴老身」（2684快活）、「愛風巖上攀松蓋、戀月潭邊坐石稜」（3103香山寺二絶其二）、「風前月下花園裏、處處唯殘箇老夫」（3268老夫）、「聞道郡齋還有酒、花前月下對何人」（3208和劉汝州酬侍中見寄長句因書集賢坊勝事戲而問之）のように、風や月のある夜とは、酒を飲んだり琴を弾いたり、散歩するのに絶好の条件であると詠っていることからそれが言える。

⑬「迎月」の語は『全唐詩』に他に用例が認められない。

NII-Electronic Library Service

⑭「長安千萬人、出門各有營、唯我與夫子、信馬悠悠行」（1176答元八宗簡同遊曲江後明日見贈）、「吟詠霜毛句、閑嘗雪水茶、城中展眉處、只是有元家」（1209吟元郎中白鬚詩兼飲雪水茶因題壁上）などに見られる。なお、白居易と元宗簡の関係については、小松英生氏「白居易と元宗簡」（『藤原尚教授広島大学定年祝賀記念、中国学論集』溪水社、一九九七）に詳しい。

⑮「可」は反語を表す当時の俗語で、ここでは「春風がどうして主の死を知ろうか、いや知ろうはずがない」という意味に解す。

⑯「春風」もまた、白居易の生涯を通して、好意的な親しい存在として詠まれるものである。誰にとっても無条件に嬉しい春を運び、花を咲かせ、心地よさを感じさせるといった属性を考えると当然のことであるが、特に退居後の詩に、「春風先發苑中梅、櫻杏桃梨次第開、薺花榆莢深村裏、亦道春風爲我來」（2608春風）、「春風爲催促、副取老人心」（3214種柳三詠其一）など白居易の気持ちを解するものが現れることは注目に値する。春風への親密度も、晩年に至るにつれて増長するものと考えられる。

⑰この詩は馬本には収められておらず、宋本巻二十六、汪本補遺による。

⑱この詩では「風月」の語を用いているが、その他、美しい月を詠んだ香山の詩は多い。「2295香山寺石樓潭夜浴」「2307舒員外遊香山寺數日不歸兼辱尺書大誇勝事時正値坐衙慮囚之際走筆題長句以贈之」「3014菩提寺上方晩望香山寺寄舒員外」「3077贈皇甫六張十五李二十三賓客」「3103香山寺二絶其二」「3467五年秋病後獨宿香山寺三絶句其二」「3469題香山新經堂招僧」など。

⑲この詩では琴を「老伴」と言っているが、「可憐月好風涼夜、一部清商伴老身」（2684快活）のように、美しい月の下で琴を弾じる様子を詠んだものは他にも見られる。

⑳前野直彬氏『風月無尽―中国の古典と自然―』月（東京大学出版会、一九七二）、竹村則行氏「李白の月と杜甫の月―李杜詠月詩論―」（『徳島大学教養部紀要』人文・社会科学、一六、一九八一）、松浦友久氏『李白―詩と心象―』飲酒、月光（社会思想社、一九八四）ほか。詳細については次注以下参照。

㉑「無情の遊」について、松浦友久氏は、「月と影とを友とした無情の交遊。それは無情なるがゆえにさびしく、しかし、無情なるがゆえに永続する。人間同士の交わりの、それゆえに生まれる暖かさと冷たさ、堅さと脆さ。そういうものを超越した自然との交わりが、「無情の遊」である」と説明されている。（『李白―詩と心象―』飲酒、前掲注⑳）。また、横山伊勢雄氏は「無情の遊は、人間的な感情を交じえない清らかなつきあい……天の川での再会というのは、仙人となって天に昇ることを空想したものであろうが、それは精神の高き飛翔を意味している」「有情の遊にはあきたからこそ、無情の遊を求めるのであろう。月と酒は、おのれを裏切ることのない友として、この詩人がことの外に愛し、数多く詩にうたったものであった」（『唐詩の鑑賞―珠玉の百首選―』、ぎょうせい、一九七八）と述べられている。なおこの詩について、竹村則行氏は「李白の月と杜甫の月―李杜詠月詩論―」（前掲注⑳）で、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

「月は「既に飲を解せざる」ものであるから、「我歌へば月は徘徊」しているかのように李白が勝手に想像するだけのものではあるが、月をかくまでに擬人化し、しかも酒席の相伴として遇することは、月に対する無量の親しみと愛惜なくしてはできない発想であろう」「李白にとって月はほとんど友人とも見まがうべき親しい存在であった」と、前野直彬氏は『風月無尽―中国の古典と自然―』（前掲注⑳）で、「酒がまわったための強がりでも、むりな誇張でもなく、月は李白が呼べば答えてくれる友人であった」「李白の詩精神は、宇宙を包んでいた。月も星も、山も川も、かれが親しみの目をもって見るとき、同じ親愛の情をかれに投げ返すのであった」と述べられている。

㉒「月は峨眉に出でて滄海を照らし、人と萬里長く相ひ随ふ、黄鶴樓前 月華白く、此の中忽ち峨眉の客を見る」（峨眉山月歌、送蜀僧晏入中京）、「琴は弾ず松風の裏、杯は勧む天上の月、風月長く相ひ知る、世人何ぞ倏忽たる」（擬古十二首其十）、「我に萬古の宅有り、嵩山の玉女峰、長く一片の月を留め、挂けて東溪の松に在り」（送楊山人歸嵩山）などもスケールの大きさという李白の特徴がよく表れている。

㉓松浦友久氏は『李白―詩と心象―』（前掲注⑳）において、月が李白の心をとらえた要因として、一、月の永遠性・不変性、二、超越性・不可触性、三、月光のもつ感覚的な特色・透明、清澄な感覚といった点を挙げ、詳しく考察されている。また『李白研究―抒情の構造―』第二章（三）李白詩の感覚的基調（三省堂、一九七六）では「詩人としての李白の資質あるいは生理において、いわばア・プリオリに、透明な輝くものへの憧憬が存在するとの見るのが自然であり、月はそうした要素をもっともよくそなえたものとして、徹底した賛美の対象となりえたわけであろう」と述べられている。なおこの詩について、竹村則行氏は「李白の月と杜甫の月―李杜詠月詩論―」（前掲注⑳）で、「ここでの月は、もはや単に天空に懸かる一景物としてあるのではない。そこから脱け出して、登場人物として十分に自立した人格を以て李白に親近しつつあるかのようである。それはつまり、李白が月をそのように擬人化して見ているからにほかならない」「月そのものも亦た李白に向かってにこやかに微笑んでいるかのようであり、そこに所謂「憂思」の翳りは些かも見られないのである」と述べられている。

㉔神聖な月と対比して汚れた現実を諷喩する内容の詩や、桂の木、女性などの描写に月を用いる詩には、月の神聖化や伝説の使用が見られる。

㉕横山伊勢雄氏は「李白の遊びにおける快楽の追求は、何よりも精神の純一化においてなされたのであり、心を世俗から解き放って、自然の清らかなものと合一することにあった」（前掲注㉑）と述べられ、また目加田誠氏は「李白は天才の常として、平凡な生活をいとって、更に高く、更に自由な、更に永遠なものを求めたのであろう。だから天上の仙界にあこがれ、酒に陶酔して、心を浮き世の外に遊ばせた」（『唐詩散策』時事通信社、一九七九）と述べられている。

NII-Electronic Library Service